

学問の儘が信仰か

君が訓戒されたのは、学問の儘が信仰であって学問の他に信仰はないのに学問と信仰は違
うと言っているのは了解に苦しむと言われたが、それなら無学の者は無信仰となるがよい
か、一応実地の求道の上から弁明し、信念を發表して後に質問致しましょう。

学問で知ったのは知解の分齊であって信仰ではない、七里和上は学問は槍の柄、信仰は蜜
の穂先と言われたが、大沼は学問は定規、信仰は剃刀と言い、又は学問は花であり信仰は蜜
であると言う、学問の定規が正しくなければ浄土真宗ではなく、剃刀が赤錆であっては真仮
の分際が鮮明にならない。多くの方々は第十八願の一本槍で進もうとされるけれども、祖師
は三三の法門を根基として、三願転入を入信の道程としていらるる事を見遁してはならな
い、柄は長くても柄であって煩惱の賊を斃す事は出来ない、穂先のみであっては自分が手
怪我をする、両方相俟って自在の働きが出来るのである。折角門信徒の援助によって大学を

卒業しながら、布教の時は説教本を使用しているのは学問が信仰でない証拠ではないか、
成程最高の学位、○○○を命じられていながら、求道者が一人も訪ねて来ないのは造花で
あつて蜜のない証拠だ、学問の儘の信仰に成っていないのだ、七里和上程の徳が誰人の上に
有るか、学問が学問に終わって同行の慕う信仰の蜜がないからだ。

八幡から乗車して関門隧道を通り、岩徳線を通れば錦帯橋は一寸見え、厳島の赤い鳥居を
眺め、原爆の広島を過ぎて岡山、神戸、大阪、京都、有名な古刹が有り、見物を終わった後
特急に乗り、名古屋、沼津、横浜を過ぎて東京に着いたとの紀行文を読んで覚えて、他人に
上手に話す事が出来ても、読んでいる人には錦帯橋も見えなければ京都の仏閣も拝めない、
知った信じた覚えたのは文字を通して想像しているに過ぎないのであつて、実地に通つた人
の味とは違う。客観的に眺めているのであるから切符を買う心配もなく、座席の有った喜び
もない、種々に変化する景色も見えなければ、面白さも判らない、況や長途の旅行も無事に

終わつたという安心あんしんさもない、文章ぶんしょうに顕あらわせない妙味みょうみは一寸ちよつとも味あじわう事ことは出来できないのだ。八幡やはたから東京とうきょうまでの都市としや特別とくべつの建物たてものは記録きろくできるけれども、味あじは実地じつちに通とおつた者ものでなければ味あじわえないから 学問がくもんと信仰しんこうは違ちがわんが違ちがう、違ちがうが違ちがわんと言いつてゐるのだ。

他の例たれいを出だせば 嵐山あらしやまの下宿げしゆくにいた時とき、夜中よなかに腹痛ふくつうの主人しゅじんが二階にかいに來きたから熊くまの胆いを飲のました。次の朝見舞つぎ あさみうと、私わたしは京都きょうとの二条にじょうの薬局やつきよくに通かよう薬劑師やくざいしだから夜の暗闇よる くらやみでも、この棚たなにはヒマシ油ゆが有あるから飲のんで腹中ふくちゆうを洗あらい、あの棚たなの腹薬はらくすりをどれ程ほどの飲のめば治なおると言いうことは承知しょうちしてゐるけれどもと言いつたが、知しつた覺おぼえた学問がくもんで腹痛ふくつうが治なおるか、祖師聖人そししょうにんの事績じせきに精通せいつうし、七祖しちそ、本典ほんてんを暗記あんきしたつてそれが信仰しんこうと言いえるものか。八万はちまんの法藏ほうぞうを讀よみ破やぶつても信しんの一念いちねんで仏智ぶつちの不思議ふしぎを諦得たいとくしなかつたら画餅がべいに等ひとしいのだ、それを学問がくもんの儘ままが信仰しんこうだと威張いばつてゐる人ひとの氣きが知しれない、お聖教しょうぎょうは指ゆびではないか、指ゆびを通して何故月な ぜつきを見みないのだ。何故御聖教な ぜ おしやうぎょう とおを通して裏うらに溢あふれてゐる親心おやこころと一体いったいに成ならないのだ。大沼おおぬまは何なんたる幸福者こうふくものだろ

う、御聖教おしょうぎょうに書いて有る事ことは書かれた本人ほんにんの信仰しんこうであって、自分は読よんで合点がってんし想像そうぞうして有難ありがたがっているに過ぎないのだ。腹底はらぞこには知らん顔かおしている逆謗ぎやくほうの屍しかばねのいる事ことに驚おどろいたのだ。実地じつちの求道きゅうどうを善導ぜんどう大師だいしや祖師そし聖人しょうにんにさして自分は居睡いねむり半分で通ろうとしている真宗しんしゅうのだ。道俗どうぞくの腑拔ふぬけ、不甲斐ふがいなさに驚おどろいたのだ、他力たうりきでも何なんでもない、それは無力むりきの親玉おやだまだ、生命懸いのちがけの求道きゅうどうがないから生命懸いのちがけの報謝ほうしゃがないのだ。二口目ふたくちめには我々われわれは自力じりきが出来ないから聖人様しょうにんさまが身替みがわりだと言いっているが、信仰しんこうは一人凌ひとりしぎと言いう事ことが判わからないのか、五劫思惟ごこうしゆいの願がんをよくよく案あんずれば親鸞しんらん一人がためなりけりとは、話はなしている知識ちしきの為ためでもなければ聞きいている同行どうぎようの為ためでもないのだ。言葉ことば（学問がくもん）でなければ導みちびかれないが、言葉ことば（学問がくもん）を離はなれ（信仰しんこう）なければ不思議ふしぎの仏智ぶつち（信仰しんこう）は諦得たいとくできないのだ。学問がくもんと信仰しんこうとは違ちがう、何故なぜか、真宗しんしゅうの道俗どうぞくは、書物しょもつを読よんで素直すなおな真似まねをして、実機じつきを抜きにして名号みょうごうを死後しごに眺ながめて、それを信仰しんこうと思おもっているのだから御聖教おしょうぎょうに調子あを合あわしているのみだ、御聖教おしょうぎょうの裏うらに溢あふれている

味とは違う、実地に求めて難中の難を突破さされ、噴き上げる煩惱の儘が御聖教と一つに成っているものでなければ学問の儘が信仰とは言えない。弁明はこの位にして置いて質問さして頂きましょう。

第一問、学問の儘が信仰と仰ってそれでよいですか。

第二問、真宗に流れを汲む者は皆第十八願の根機ですか。

第三問、三願転入は祖師一人の為の入信の径路であって、一般道俗には通用しないのか、不必要なのか。

第四問、弥陀は五劫思案の時、我等の根機を見抜いて摂生の三願を建立し、釈尊は三經に開設されたが、三願転入は吾等の真理に趣入する道程ではないのか。

第五問、読んで合点して有難がる智慧の分齊、感情の分齊を以て他力不思議の信仰として

よいか。

第六問、第十八願の境地に趣入する迄の途中で自力の善根を励み、他力の名号に眼がつき、開発しないで困っている処までを雑行雑修自力の心を振り捨ててと教えられたのではないのか、初めから皆十八願の根機としてよいか。

第七問、第十八願の極致まで進んだ人が専修の行者で報土往生、合点している人が第二十願の雑修の行者で化土往生ではないのか、真仮の分際を分別せずして直に第十八願の機類としてよいか、実地に趣入して到達した時が学問の儘が信仰と言えるのではないか。

第八問、化土往生は自力だから難しい、報土往生は他力だから易いと言っているが、学問で合点したのを他力の深信のように思い、上迂りで第十八願に趣入した積りだから真の難信易行を知らないのではないか。

第九問、信仰しんこうの入口いりぐちにいて、宿善しゆくぜんが厚いあつと自惚うぬぼれて信後しんごの真似まねしているから易いやすので、祖師そしの難中なんちゅうの難なんと仰おおせられた難なんと易いの真仮しんけの分齊ぶんさいを無視むししてよいですか。

第十問、畢竟ひつきよう学問がくもんの為ための学問がくもんであつて結局逆謗けつきよくぎやくほうの屍しかばねは流転るてんしているのだ、その機きが若不生にやくふしよ者じゃ不取正覚ふししよくがくの誓ちかいに因よつて、今生いまかされなかつたら正覚しよくがくを投げ出すぞ、生まれさすとは死後しごではない、自力じりきの機執きしゆうが淨尽じようじんされた時ときが他力不思議たうふしぎに生まれさされたので、その開発かいほつささるる事ことが難中なんちゅうの難なんではないか。実地じつちに晴はれた時ときが学問がくもんの儘ままが信仰しんこうと言いえるのではないか、実地じつちの求道きゆうどうを抜きにして学問がくもんの儘ままが信仰しんこうと簡単かんたんに片付かたづけてよいか、私の諦得たいとくさされた味あじから追究ついぎゆうしているのですから学問がくもんの御批判ごひはんを願ねがいます、実地じつちに信仰しんこうを求もとめている人ひとは腹痛はらいた（実地じつち）で苦しくるんでいるのです、頭痛膏づつうこう（学問がくもん）位くらいでは満足出来まんぞくできない処ところが有ありますから鮮明せんめいにして頂いたきたいのです。